



Title	現代日本語における数量詞の種類について
Author(s)	張, 琴琴
Citation	研究論集, 23, 283 (左) -302 (左)
Issue Date	2024-01-25
DOI	10.14943/rjgshhs.23.l283
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/91098">http://hdl.handle.net/2115/91098</a>
Type	bulletin (article)
File Information	16_rjgshhs_23_p283-302_l.pdf



[Instructions for use](#)

# 現代日本語における数量詞の種類について

張 琴 琴

## 要 旨

本稿は、「約3冊、大体50人、大体30人前後…」のような物事の量・数を曖昧に表すものを含め、日本語の数量詞を包括的に分類したものである。従来の研究では、語彙の意味内容により数量詞は7種類に分けられ、数詞の後ろに類別詞が付くか付かないかによって2種類に大別されてきた。しかし、いずれの分類においても、あらゆる数量詞を対象としており、体系的に分析されているとは言えない。

そこで、本稿は「2個、5匹、たくさん、かなり…」といった数量詞だけでなく、「大体7頭、20人ぐらい、大体30人前後…」のようなものも考察対象とし、準特定数量詞という新たな分類を提案する。結果としては、特定数量詞、不特定数量詞、準特定数量詞という3つのカテゴリーに分類した。

また、今まで数量詞構文や遊離数量詞などが盛んに議論されてきた一方、数量詞の種類についてはあまり注目されていなかった。そのため、本稿が提案した準特定数量詞というカテゴリーに属するものは、ほとんど分析対象とされなかったと言える。したがって、準特定数量詞の下位分類として、どのようなものがあるのかについて細かく説明する。

以上のように、本稿では数量詞を整理した上で、新たな分類を提案し、数量詞の種類について体系的に考察を試みる。

## 1. はじめに

数量詞とは、数や量を表すことばであり、数詞（1、2、3…）と助数詞（枚、匹、回…）で合成されたものを指す。同じ機能を持つ「たくさん、すべて」などを含める場合もある。国語学の伝統では、数詞は数と助数詞のセットを指すが、現在はそれを数量詞とする定義が広く使われている（明解日本語学辞典）。しかし、「約2個、20～30人…」のようなものも数量詞と同様な機能を持つとは言うものの、これについてはほとんど言及されていない。また、益岡・

田窪（1992）は「2冊，4本…」といった物事の数量を表す言語形式を数量表現と定義している。本稿では、できるだけ形式上多様である数量詞を収集し、包括的に分類を試みることを目的とするため、「1冊，たくさん，2，3時間…」などのような物事の数・量を表すことばのことを統一的に数量詞と呼ぶこととする。

上記に触れた助数詞は元々学校文法での呼び方であり，言語学では類別詞（numeral classifiers）と呼ぶ。従来の研究において，助数詞と類別詞の区別をせずに行った考察が多く見られる。数量詞に関する研究の中で，加藤（2003）は「10段の階段」「480 kmの北陸道」が存在数量<sup>1</sup>を表す数量詞を使っておらず，類別詞がずれていると指摘している。

- （1） 10段の階段を登った。
- （2） 階段を10段登った。
- （3） 北陸道を480 km走った。
- （4） 480 kmの北陸道を走った。

（加藤 2003：442）

また，成田（1990）では，「2議員，4県，7大学」などのような名詞と同形で数詞に後接して用いられるものを名詞と同形の助数詞と述べている。これに対して，東条（2015）は「名詞と同じ形態をとる」助数詞を「名詞型助数詞」と名付けている。しかし，日本語の品詞論を考えると，元々助数詞というカテゴリーは存在せず，名詞の下位区分として「名詞型助数詞」という分類もない。したがって，「名詞型助数詞」という用語は適切ではないと考えられる。言語の形態的な観点からみると，数詞に後接する助数詞は接辞と呼ばれている。そのため，本稿は形態上の整合性を考慮した上で，「(7)大学」などを接辞の一種として扱う。要するに，「(7)大学」のようなものも助数詞の一種である。本来，助数詞と類別詞の違いなどを区分する際には，「7大学」のような助数詞を避けてはならないと考えるが，本稿は数量詞の種類を中心に議論するため，この問題についてここではこれ以上立ち入らないこととする。そして，現在の研究においては，助数詞という用語の使用が主流となっているため，本稿もこれに倣って類別詞ということばを使用せずに，助数詞を用いることとする。さらに，これらを考え合わせてみると，日本語の助数詞には自立性を持つ名詞（例：大学，時間）と自立性を持たない接辞（例：個，冊）の2種類が存在することがわかる。つまり，数詞と助数詞（名詞，接辞）により組み合わせたものを数量詞と言うことである。本論文では，このようなものを数量詞と見なし，「2

<sup>1</sup> 存在数量とは，その対象の数量について，どのくらいあるかということである。例えば，「林檎を半分食べた」の中の「半分」は林檎の存在数量ではなく，非存在数量となる。「3個」は「林檎」の存在数量である。

冊」や「たくさん」、「およそ2時間ぐらい」などの数量詞について、それぞれ特定数量詞、不特定数量詞、準特定数量詞の3つに分類する。さらに、照応性を持つか否かという特徴によって、3種類の数量詞の下位区分として、どのようなものが存在するかについて、具体例を挙げながら詳しく分析する。

本論文の構成はまず、第2節において、本稿の用語と定義について説明し、数量詞の分類に関する先行研究を整理する。次の第3節では、数量詞の特定性について詳しく述べる。第4節において、準特定数量詞の下位分類について細かく考察する。最後の第5節においては、まとめと今後の課題について述べる。

## 2. 本稿の用語と定義

上記で述べたように、これまでの研究において数量詞や類別詞に関する呼び方は多様であり、統一していないことがわかる。この現象を生み出したのは数量詞自体の形式が豊富であるからだと考えられる。そこで、本節では形式的な考察を行う前に、まず本稿における用語や定義について説明する。そして、従来の数量詞の分類を整理する。

### 2.1 助数詞

助数詞とは、数詞にそえられ、数えられるその対象（もの・こと）の性質・形状・様態・種類などを表す語である（三保2006）。日本語において、「1枚・2回・3個」の「枚・回・個」などを助数詞と呼び、数える物ごとによって使い分ける。中国語においても同様なものがあり、「3冊」の「冊」を量詞と呼び、一般的に人や事物、動作の数量単位を表す。現代日本語の助数詞の中で、鳥類を数える「羽（わ）」という和語があるほか、人数を数える「人（にん）」という漢語もあり、フランスからの物の長さや距離を表す「メートル」のような借用語もある。また、漢語の中で、「（7）大学」、「（6）時間」のような助数詞も存在する。これは日本語における一つの特徴だと言えるだろう。

三保（2010）では、古代の文献などから文字化されている助数詞の使用事実を整理し、助数詞の使用を通時的研究の視点から詳しく記述している。また、三保（2010）によると、日本語の助数詞について本格的な研究を行ったのは、池上（1940）の「助数詞攷」と渡辺（1952）の「日華両語の数詞の機能—助数詞と単位名—」である。現代の中国語（普通話）において、量詞に近い使い方を持つ単位も含めると約300種類以上が常用表現として用いられている。一方で、日本語においては、助数詞及び助数詞と同じ働きを持つ名詞を含めて約600種類前後がある。『明解日本語学辞典』によれば、「枚」は「紙、1万円札、皿」などの名詞を数えることができることから「薄いもの」というカテゴリ—情報を持ち、名詞を分類しているという見方できると、記述している。ところが、助数詞の一つとして、「…事件」のようなものが類別詞と

して扱われてよいのか、まだ議論の余地があると考えられる。一般的に、「事件」を数える際に、通常「件」を用いて数えるため、これは名詞を分類しているとは言えないことがわかる。

(5) 25件の事件のうち17件が車の速度超過関連のものだ。

本稿では、前述したように、広範なデータを用いて分類を目指すため、「7大学」のようなものも一種の数量詞と認める。また、用語使用の統一性から考え、「匹・本・尾…」などの接辞と「大学・時間・種類…」といった名詞を助数詞と称する。つまり、数詞と助数詞で合成したものを一種の数量詞と称する。

## 2.2 照応性

照応性とは、文章や文脈内でことばやフレーズが以前に現れた要素を指し示す関係を指す。言い換えれば、ある表現が先行する表現を参照している状態を指すものである。これにより、文章内での情報の結びつけや理解を可能にする。日常会話では、同じことばや物事を重複させないようによく使われる談話手段の一つである。日本語において照応性は、特に指示詞や代名詞などの言語要素を通じて表される。以下にいくつかの例を挙げて説明する。

- (6) シャインマスカットを食べた。それはとても美味しかった。
- (7) 兄は新しい車を買った。その車はとても速い。
- (8) 太郎が来た。彼は新しいプロジェクトのリーダーになるそうだ。
- (9) 一昨日、公園で友達に会った。彼らは楽しそうにしていた。

(6)の「それ」は先行詞「シャインマスカット」を指し示しており、指示詞による照応が行われている。日本語では、このようにある要素が前に現れているものを照応する場合は、前方照応と言う。これに対して、後ろに出現するものを照応する場合は、後方照応と呼ぶ。また、(8)は代名詞「彼」を通じ、先行詞「太郎」を指し示しているため、これも前方照応となる。実際に、日本語では指示詞や代名詞のほか、数量詞には照応性を持つものがある。例を以下に示す。

- (10) 父が月餅を20個買ってきた。昨日、弟が半分を食べた。

具体的な数量を提示しなければ、「半分」と言ってもどんなものの半分かがわからないため、文として不適切であるが、(10)のように、事前に数量を提示しておけば、「半分」で表す量を計算できる。つまり、(10)の「半分」は10個の月餅を指し示している。これまでの数量詞に

関する研究において、照応性の観点から議論されているものは非常に少ない。本稿はまず、照応性の有無から数量詞の種類を見ていく。今後、数量詞がどのように照応性を持つかや、どのように文脈と関連して意味が形成されるかを詳細に分析していく。

### 2.3 数量詞分類の概観

数量詞というのは、複数形の語尾<sup>2</sup>を持たない日本語の名詞の数や量をあらわす際に使われることばであり、一般的には、「1, 2」などの数を表す数詞と「人, 匹」などの助数詞からなるものを指すほかに、全部, 半分, 一部, 四分の一などの全体, 或いは部分の数量を表すものや, たくさん, 大勢, 少し, 多くなどの数量の多寡を表すものも含めている。益岡・田窪 (1992) では、名詞のうち数量を表す名詞を「数量名詞」と呼んでおり、数量名詞には、名詞単独で数量を表すものと、「数の名詞+助数辞」や「指示詞+ほど」、「くらい」などのように、接尾辞や接尾辞的な語と組み合わせて初めて、数量名詞になるものがある。単独で数量を表す名詞には「大勢, 多く, 多数, 少数, いくらか, 大部分, 半分, 全部」などがあると述べている。確かに形容詞「多い」の連用形「多く」は「多くのもの」のように名詞として使用できるが、「オーディションに魅力的な若い女性が多く集まっている。」のように副詞としても用いられる。よって、複数の品詞に跨っているものを容易に名詞と判断することができないと考えられる。また、益岡・田窪は意味的用法から数量詞を3つに分類している。

表1 益岡・田窪 (1992<sup>2</sup>) を踏まえて筆者がまとめたもの

数量名詞	意味上	数量の多少を表すもの	大勢, 多く, 多数, 少数などがある。
		具体的な数量を表すもの	一個, 三羽, 四冊や, どれほど, どのくらいがあり, 「ちょうど, きっかり, ぴったり」, 「だいたい, おおよそ」などの副詞や, 「せいぜい, たった, ほんの」などの連体詞によって修飾され得るものがある。
		集合の部分や全体を表すもの	半分, 3分の一, 一部, いくらか, 全部, 全員などがあり, このうち全体を表すものは, 量の副詞「ほとんど」などによって修飾され得る (ほとんど全部)。

これに対して、宇都宮 (1995) は日本語の数量詞を語彙の意味から7種類に分けている。表2に示す。

<sup>2</sup> 言語学では、複数とは「2個以上」の数量を表現する。英語の名詞は基本的に単数と複数とを区別して扱う。『日本語文法事典』(2014)によると、日本語の名詞には、このような単複を区別するカテゴリーが存在しない。「人々」「山々」「国々」のような反復形を使って、多数性をあらわすことがある。ヒトをあらわす名詞に付く接尾辞「-たち」「-ら」は多数性をあらわすが、その接尾辞がない形式は、多数であるか否かに関与しない。

表2 宇都宮（1995）を踏まえて筆者がまとめたもの

定数	具体的な数字で確定的な数量を表すもの	3人・5つ・両方・100m…
全数	集合の元を余すことなく指し示すもの	すべて・全部・みんな・全体…
個別数	集合中の個々の元を指し示すもの	一人一人・それぞれ…
部分数	一集合の割合、部分を表すもの	半分・3割・一部・80%…
量数	数量の多・少を表すもの	たくさん・いっぱい・多く…
概数	おおよその数量を表すもの	数人・大体・いくつか（も）…
疑問数	認知していない数量を表すもの	何人・いくつ・どのくらい…

両者を比較してみると、益岡・田窪は「だいたい」などの副詞によって修飾され得るものを「具体的な数量を表すもの」として分類するのに対して、宇都宮は「おおよその数量を表すもの」として捉え、「概数」というカテゴリーに区分している。本来、「大体」は全部ではないが大部分を表す意味であるため、具体的な数量を表すものではないと判断できる。また、益岡・田窪は「ほとんど」などによって修飾され得るものも数量詞としているが、宇都宮の分類ではこれについて言及されておらず、「ほとんど」といった数量詞は数量の多・少を表せるので量数であろうが、意味内容は全数に近いと説明している。さらに、益岡・田窪の「数量の多少を表すもの」というカテゴリーに「ほとんど」ということばを入れていない。また、「20～30人・4～5回」といったものをどのカテゴリーに分類するかについて、両者とも触れていない。しかし、このような表現は日常会話において、しばしば現れるのが事実である。よって、益岡・田窪と宇都宮の分類について再検討する必要がある。

さらに、上記の分類法と異なり、加藤（2003）は数詞の後ろに類別詞が付くか否かという観点から、類別詞を伴ったものを特定数量詞とし、類別詞を伴わないものを不特定数量詞と定義している。そして、「数件」という数量詞は一定の幅を持っており、完全に不特定な数量を表しているわけではないと指摘した。本稿はこの指摘から示唆を受け、日本語における物の数や量を具体的に表せず、一定の幅を有しているものを準特定数量詞と呼ぶことを提案したい。これにより、今まで数量詞としてほとんど扱われていなかった「大体5本、5匹くらい、約5時間」のようなものを包括的に分類することができる。もちろん、この中には上記に述べた「20～30人」のような桁が同じである二つの数詞が並んでいるものも含まれる。また、「3冊」や「たくさん」のようなものに関して、本論文はまず特定の数量を表すか否かということを判別し、そして、照応性を持つか持たないかによって細分化していく。本研究における3種類の数量詞について以下に示す。

① 特定数量詞：特定の数量を表し、照応性を持たないもの。

1個、3冊、5匹、1メートル、100g、4人、1件、3大学、5時間…

- ② 不特定数量詞：不特定の数量を表し、中には照応性を持つものと持たないものがある。  
全て、たくさん、かなり、多く、少し、大勢、全員、ずいぶん、半分、三分の一、80%…
- ③ 準特定数量詞：特定の数量を表せず、一定の幅を有しており、照応性を持たないもの。  
主に副詞、副助詞、名詞によって修飾された準特定の数量を表すもの。  
数人、20～30人、3～5回、大体200g、およそ5マイル、約5本、大体5冊くらい、500人前後、何人か、いくつか…

### 3. 数量詞の特定性

従来、西洋言語の影響を受け、日本語研究では定名詞句や不定名詞句の特定性 (specificity) について盛んに議論されてきた。日本語の品詞分類において、「を」+「する」の組み合わせの自立語の中で活用を持たず主語となることができるものを名詞に分類されるのが一般的であり、さらに、細分化された下位分類には数量詞が含まれる。しかし、前述したように、日本語の数量詞は様々な形を持ち、多様性に富んでいる。すべての数量詞はこの規則に当てはまるのかという問題について検討の余地があると考えられる。例えば、「かなりの人が間違えている。」を見ると、「かなり」という数量詞は名詞として後接する名詞「人」を連体修飾しているように見える。しかし、「彼はかなり頑張っている。」「昨日のバーベキューでマシマロをかなり食べた。」のように、同時に副詞として動詞を修飾することができる。よって、品詞を決める際に、数量詞をどのように捉えるか先行研究ではほとんど二分化されている。本稿は、数量詞の分類を考察するものであるため、品詞上の問題についての議論は別の機会に譲る。

本論は数量詞が特定の数量を表すことができるか否かという観点から、特定性という用語を用いる。さらに、特定性を具有するかによって、特定性を持つ特定数量詞、特定性を持たない不特定数量詞への分類を試みる。ここから、これらについて詳しく説明する。

#### 3.1 特定性を持つ特定数量詞

特定性とは、具体的な数や数量を指し示すことができる数量詞の性質のことである。加藤 (1997, 2003) は、具体的な単位を伴った特定の数量を特定数量詞と定義しており、例えば、「200g」、「250km」などが挙げられる。本論は、「3時間」、「7大学」のような自立性を持つ名詞が助数詞として用いられるものも考慮に入れ、統一に特定数量詞と称したい。また、(11) のように、「1つ」はどの「アイデア」を指すのかわからないため、「照応性」を持たないと判断できる。照応性を持つ条件として、事前に基準となる数を表さなければならない (例えば、リングを3個買った。その3個のリングを食べた。<sup>3)</sup>)。つまり、本論における特定数量詞は、特定の数量を表せるが、照応性を持たない。続いて、特定数量詞にはどのようなものが含まれるのかに



ついて検討していく。

- (11) 良いアイデアが1つ思い浮かんだ。
- (12) 今日りんご1個, 20円セール実施中。
- (13) 外国語を学びたいなら, 辞書は1冊あったほうがいい。
- (14) 太郎はお金持ちで, 車を5台も持っている。
- (15) 日本にこれまで5回行ったことがある。
- (16) 1億円当たったら, 何を買いたい?
- (17) 2017年の憲法記念日に安倍氏は「憲法を改正し2020年の施行を目指す」と初めて具体的な日程に言及し, その年の秋の衆議院選挙では, 憲法改正を政権公約の重点項目に位置づけ, 翌年「自衛隊の明記」をはじめ4項目の改正案を発表しました。

(<https://www3.nhk.or.jp/news/special/minnanokenpou/seitou/jimin.html>)

上記はすべて特定数量詞に関する例である。日本語には数える対象の種類や形状という性質によって使い分けられる類別詞(つ, 個, 冊, 台)と「回, 円, g(グラム)」のように物の単位を表すものがある。益岡・田窪(1992)は前者を類別詞, 後者を単位辞と呼ぶ。単位辞には時間や金額, 回数, 順序, 距離, 長さ, 重さ, 体積, 面積などがある。現在の日本語数量詞研究において, 類別辞と単位辞の違いをほとんど区別せず, 統一に「助数詞」と呼ばれている。また, 「4項目」のように, 名詞を類別詞として用いられるものが見られる。前述したように, 本稿はこれを助数詞の一種として扱う。さらに, 上記の例から観察できるように, 助数詞の中には, 和語系のものであれば, 漢語系や借用語系のものあり, 豊富なバリエーションを持っている。もちろん, 助数詞だけでなく日本語の数詞(自然数)も同様に, 和語系列数詞や漢語系列数詞, 借用語系列<sup>4</sup>数詞がある。この点から, 他言語と比較すると, 日本語の数量詞(数詞+助数詞)は非常に複雑なものであると言えるだろう。

- (18) 新卒の平均給与は25万まで上がった。
- (19) その店で私はみかんを20買った。 (加藤2003:433)
- (20) \*その店で私はみかんを3買った。 (加藤2003:433)

<sup>3</sup> 直接に「リンゴを3個買った。3個のリンゴを食べた。」とは言えない。また, 実際に指示詞「その」を付けないと, 照応性がなくなる。つまり, 特定数量詞は単独で照応性を表すことができない。

<sup>4</sup> 1から10までの数詞をまとめてみると, 和語系列数詞には, ひと・ふた・み・よ・いつ・む・なな・や・この・とおがある。漢語系列数詞には, いち・に・さん・し・ご・ろく・しち・はち・きゅう/く・じゅうがある。英語系列数詞には, ワン・ツー・スリー…テンがある。

日本の通貨の単位「円」は金額を数えるときに使われている。しかし、会話の中では必ずしも現れるわけではない。(18)のように、「円」を用いないこともある。この現象について、加藤(2003)も指摘している。つまり、日常会話では助数詞が欠落することがあり得る。もちろん、(18)、(19)を「25万円まで」、「20個買った」に書き換えても構わない。しかし、どのような条件下で助数詞の省略が可能なのかという問題について、加藤は指摘だけにとどまっている。これに関して、数詞の数の大きさにかかわっているのではないかと考えられるが、数が大きい小さいかは発話者の個人判断によることもあり、簡単に決めることができない<sup>5</sup>。

### 3.2 特定性を持たない不特定数量詞

日本語においては、特定性を持つ特定数量詞より、特定性を持たない不特定数量詞のほうが明らかに複雑でありながら形式が多い。日常生活では、「たくさん、かなり、多く、少し、大勢、ずいぶん、大体、ちょっと…」のようなものがよく見られる。このうち、日本語記述文法会(編)(2009)では「ずいぶん、かなり、少し、ちょっと」という語を程度の表す副詞的成分<sup>6</sup>に分類している。一方、「たくさん」については、量を表す副詞<sup>7</sup>的成分として述べている。「大勢」については、「多数、少数」と同じように数量の多寡を表す名詞として扱い、「大体」は「ほぼ、ほとんど」と同様に概略・概括的な程度を表す副詞的成分に区分される。このように、それぞれ異なる性質を持つものが後ろに共起する動詞によって、同じ役割を果たすことが可能であることがわかる。

- (21) たくさん歩いた。
- (22) かなり歩いた。
- (23) 人が多く集まっている。
- (24) 寿司を少し食べた。
- (25) 子供たちが学校から大勢出てきた。
- (26) 期末レポートが大体終わった。

(21)は動作動詞「歩いた」の量に解釈できる。(22)の「かなり」は「歩いた」にかかり、連用修飾部分となる。この場合では、どの程度歩いたのか正確なデータは把握できないが、「か

<sup>5</sup> また、文脈と関わるか否かは、議論に値する。

<sup>6</sup> 日本語記述文法研究会(編)(2009)の第6章では、あり方の副詞的成分とは、動きや事態のあり方を表現することで、動きや事態の実現の仕方を限定し特徴づける成分であると説明している。この中に、様態を表す副詞的成分、結果を表す副詞的成分、程度を表す副詞的成分、量を表す副詞的成分を含めている。

<sup>7</sup> 詳しい内容は日本語記述文法会(編)(2009):203を参照されたい。

なり」ということばから普段の歩数より多いと推測できるだろう。また、「かなり」は個人の判断にもよるため、10000歩と推測できれば、20000歩、30000歩も可能である。つまり、個人の価値判断が含まれている。これについて、加藤（2003）は不特定数量詞が数量そのものを明確に表すわけではないが、一般に価値判断を含んでいると指摘している。加藤での不特定数量詞とは、類別辞がなく、不特定の数量を表すにすぎないものである。この中には、「全員、全部、すべて、みんな」といった全称数量詞も含まれる。宇都宮（1995）では「全数」と定義されているが、日本語記述文法会（編）（2009）は「全体を表す名詞」と定義している。確かにこれらのものは名詞のような振る舞いをするができるが、「ご飯を全部食べた」のように、副詞的な機能も持つと考えられる。つまり、名詞であるか副詞であるかについて、簡単に判断できないと考えられる。本稿は不特定の数量を表すものを不特定数量詞と呼ぶこととしているが、中の全称数量詞や「半分」、「80%」のような部分数量を表すものが照応性を持つ点から、不特定数量詞を二分化する。例えば、(24)の「少し」は寿司を食べた量と解釈できるが、具体的な量がわからないため、照応性を表すことができない。(23)、(25)、(26)も同様である。しかし、(27)、(28)を見ると、「全部」は4個の桃を指し示していることがわかる。「半分」は1Lであり、「80%」は1.6L、「2分の1」は半分と同じ意味であるため、1Lとなる。このように、この種の不特定数量詞が先行詞を照応する機能を持ち、照応性を有すると判断できる。

- (27) 先週、スーパーで桃を4個買った。今日、全部食べた。  
 (28) 2Lのミネラルウォーターを半分／80%／2分の1を飲んだ。  
 (29) 新入社員は全員サインした。  
 (30) \*注文した料理は全員届いた。

また、全称数量詞の中には意味的に助数詞に相応するものもある。(29)において、すべての新入社員がサインしたということである。語彙構成要素からみると、「員」は造語成分の一つであり、一般的に人や物を表す。例えば、「社員、役員、委員、会員、職員、人員、教員…」などがある。物と言え、幅員のような周り、周囲を表すものがあるが、(30)のように「料理」と共起できず、非文となる。ところが、「注文した料理は全部届いた。」に言い換えると自然な文となる。加藤（2003）は「全員」が人間にしか使えないと指摘した。

このように、本稿の特定性を持たない不特定数量詞には、「たくさん、かなり、多く、少し、大勢、ずいぶん、大体、ちょっと、ほぼ、ほとんど、すべて、全員、全部、半分、80%、3分の1」などのものがある。この中では、「たくさん、かなり、多く、少し、大勢…」は照応性を持たないものであり、「全員、全部、すべて、半分、80%、3分の1…」は照応性を持つものである。

#### 4. 準特定数量詞の下位分類

前章では特定性を持つ特定数量詞と特定性を持たない不特定数量詞について詳しく述べた。次に、具体例を挙げながらこの2種類の数量詞の中間段階にある数量詞を考察していく。下位分類を行う前に、準特定数量詞はどのようなものであるかについて説明する。既に述べたように、宇都宮(1995)では、「数人・大体・いくつか(も)…」のようなおおよその数量を表すものを概数に分類されている。しかし、本稿の分類法によると、「大体」は不特定数量詞に含まれている。また、加藤(2003)は「数(すう)」と助数詞「件・本」の組み合わせによる「数件」、「数本」のようなものについて、明示的に特定数量を表すわけではないが、一定の幅を持っており、完全に不特定数量詞を表しているわけでもない。統辞的な振り舞いを見ると、特定数量詞に似ていると指摘している。このように、特定数量詞と不特定数量詞以外に、中間的な数量詞が存在すると考えられる。しかし、従来の研究では主に宇都宮と同様に概数として扱われており、また加藤も指摘だけにとどまっている。そこで、包括的に日本語の数量詞を考察するため、本稿はこれまでほとんど光を当てられてこなかった中間的な特定性を持つ数量詞を準特定数量詞として提案する。この種の数量詞は特定数量詞と同じように、先行詞を照応する機能をもたないため、一般的に照応性を持たない。次節から「数件」のような「概数を表す数詞<sup>8</sup>+助数詞」と合成された数量詞以外にどのようなものがあるのか細分化していく。

##### 4.1 (1) [副詞+数量詞]型

日常会話において、「約50個入っている。」「数羽の鳥が空を飛んでいる。」のように、副詞と数量詞<sup>9</sup>が合成されたものや、概数を表す数詞と助数詞が組み合わせられたものが頻繁に聞かれる。この節では、まず副詞+数量詞で合成されたものについて説明する。

- (31) 庭園の見学は約3時間かかる。
- (32) 目的地まではおおよそ40分かかるらしい。
- (33) 病院は駅からおおよそ5マイルだ。

言語研究では、(31)(32)(33)のように「約、おおよそ、おおよそ」が数量詞の前に現れるも

<sup>8</sup> 「正の数(すう)」のように、「数」は名詞として、自立的に用いることができる。しかし、「数人がいる」のように、「数」は造語成分の一種と見なすことも可能であると考えられる。本稿では、「数」は基数詞と同様に、かず(範囲がある)を表すことのできることから、広義の数詞として扱いたい。この場合では、名詞に属する一つの下位区分「数詞」となる。

<sup>9</sup> 本稿の分類によれば、特定数量詞に相当するが、用語の使用を簡潔にする目的で、数量詞と呼ぶこととする。

のを前置助数詞型とする考えが見られる。仮に前置助数詞型とすれば、ある意味では物の性質を表すことができるはずである。しかし、(31)～(33)の例文から判断すると、性質でなく、後ろに付く数量詞の数・量をぼやかしていることがわかる。元々助数詞とはどのような事物の数量であるかを表す語要素であり、常に数詞に後続する。したがって、前置助数詞という用語はやや不適切だと考えられ、本稿では、「約、およそ、おおよそ」などのものを副詞とする。これらの副詞は特定性を具する特定数量詞を曖昧化する機能を持っている。このほか、数量詞の前によく現れる副詞として「大体」が挙げられる。宇都宮（1995）では概数とされているが、益岡・田窪（1992）は副詞として扱っている。確かに、品詞上「大体」は名詞と副詞という二つのカテゴリーにまたがっている。意味上からみると、数量を大づかみに捉える点で概数と言っても過言ではない。しかし、本稿はよく数量詞と同時に現れ、数量詞を修飾しているように見えるものを副詞として扱う。このように、「約・およそ・おおよそ・大体+数量詞」という組み合わせを〔副詞+数量詞〕型というカテゴリーにまとめる。以下は「大体」の例である。

(34) 一つのクラスは大体 30名から成り立っている。

(35) 「言語学概論」という授業に登録した人は大体 120人いた。

(36) 昨日買った豚肉を大体 100gに小分けして冷凍した。

#### 4.2 (2) [「数」+助数詞] 型

日本語において、「数(すう)+助数詞」で組み合わせた表現がよく見られる。加藤（2003）は、「数」と類別詞の組み合わせによる「数件」、「数本」、「数十段」のような数量詞が特に多寡に関する判断を含まないことで、「数」を含む数量詞を特定数量詞の変種と捉えている。また、概数として分類される場合もある（宇都宮1995）。一方、日本語記述文法研究会（編）（2009）では、添加型を数量詞構文の一つとする説明の中で、「数名」という数量詞が挙げられているが（その事故で、通行人数名が大けがを負った。）、数量詞自体がどのような特徴を持つのかについては明記されていない。加藤はこれを特定数量詞の変種として捉えているが、「数」は数量の一定の幅を指し示しているため、概数を表す数詞として捉えられると考える<sup>10</sup>。本稿は「数名・数件・数軒・数回」といった「概数を表す数詞+助数詞」により合成された数量詞を準特定数量詞と呼ぶこととする。『大辞泉（第二版）』では、「数人」を「2, 3か5, 6ぐらいの人数」、「数次」を「2, 3回か5, 6回程度の回数」、「数日」を「2, 3日か5, 6日程度の日数」と記述している。また、この場合の「数(すう)」は、「物がいくつあるかを表す観念」と説明されることがある（『広辞苑（第七版）』）。さらに、『(精選版) 日本国語大辞典』によれば、「数日」

<sup>10</sup> 一般的に、「数(すう)」は「2～9」の間の数(かず)を指す。「1」を表すときに、「数(すう)」を使わない。

は三～四日、五～六日ぐらいの日数を漠然という語であり、古くは「すじつ」と言う。「数次」は三～四回、五～六回ぐらいの回数を漠然という語であり、古くは「すじ」ということである。総合的に見ると、数量が多い意にも、わずかの意にもなることで、「数」と組み合わせる表現は準特定数量詞に区分したほうが相応しい。そして、これら以外に、「数十人」、「十数人」のようなものがある。「数十」は一般的に二十から九十の間の数を表し、「十数」は十一から十九の間の数を表すのではないかと考えられる。そうすると、「数十、十数」は「数」と同様に、概数を表す数詞と見なせる<sup>11</sup>。よって、準特定数量詞の一つの下位区分として〔「数」+助数詞〕型に分類する。具体的なものを以下のように整理しておく。

「概数を表す数詞（数-すう）+助数詞」：

数回、数年、数行、数件、数軒、数個、数日、数月、数台、数尺、数丈、数世、数声、数頭、数人、数円、数匹、数枚、数目、数列、数冊、数着、数袋、数本、数羽、数時間、数十個、十数冊などがある。

- (37) 名古屋には数人の友達がいる。
- (38) 父はこの映画を数回見た。
- (39) 花子が会社を辞めてから数日経った。

実際の日常生活では、このような表現に個人の価値判断が含まれている。例えば、(39)は花子が会社を辞めてから過ぎた時間を表す例である。この「数日」という時間に対して、個人差が出る可能性がある。普通、若い人はまだ年齢が小さく、社会経験や人生経験などが豊富ではないため、「数日」を短い日数と感じやすい。一方で、年と取った人にとって、「数日」に対する感覚が長くなりやすいようである。また、前後の文脈により、数量に対する判断も少し変わってくる。例えば、「今日は20日で、先週金曜日に花子が会社を辞めてから既に数日経った。」とすれば、会話の時点から遡って具体的日数を計算することができる。この場合では、「数日」で表す日数が大体決まっていると考えられる。また、発話者が花子との関係によって、心理上感じた時間の長さが異なる場合もある。

#### 4.3 (3) [数量詞+副助詞] 型

宇都宮(1995)は、数量詞に付加される接辞の存在という現象に興味を持ち、「およそ」、「ほど」などは「およそ500個」、「3人ほど」のように定数に付いて概数的な機能を加えると述べ

<sup>11</sup> 実際これら以外に、「数百」、「数千」、「数億」のようなものもある。これも同じように扱うことができると考えられる。

ている。しかし、これに対する詳しい説明が見当たらない。「およそ」は確かに数量詞の前に置くことができるが、これだけで接辞と判断すると不適切だと考えられる。また、「ほど」も同じく、数量詞に後接することができるが、接尾辞ではないと考えられる。前述したように、本稿は「およそ」のようなものを副詞として扱う。そして、本節では「ほど」のようなものを副助詞として扱う。続いて、〔数量詞＋副助詞〕型について説明する。まず、具体例を挙げる。

- (40) 大学まではバスで1時間ばかりかかる。
- (41) 実績を積んで仕事が軌道に乗るまでに10年ぐらいかかる。
- (42) 5メートルほど近い。
- (43) 現代の中国の20歳代は基本的に一人っ子だ。
- (44) 食費は毎月3万円ぐらいかかる。

「ばかり」や「ぐらい(くらい)」、「ほど」は前後に接続するものによって、いくつの意味があるが、以上の例における「ばかり・ぐらい(くらい)・ほど・代」といった副助詞は数量詞の後ろに付くときに、明確な数字を定めないという同じ特徴を持っている<sup>12</sup>。つまり、数量詞がこれらの副助詞に前置されるとき、おおよその量を表す。「ぐらい・ほど・ばかり」の意味役割はほとんど同じであるが、実際使用上には微妙な違いがある。例えば、話し言葉では、「ぐらい(くらい)」のほうが多く用いられるが、「ばかり」はほとんど使わない。このように、数量詞の後ろに副助詞を付けることができるという共通の特徴が観察できる。そこで、この構造から本稿は〔数量詞＋副助詞〕型に分類することとする。

#### 4.4 (4) 〔数量詞＋名詞〕型

益岡・田窪(1992)では副詞によって修飾され得るものによって少し触れたが、「程度」、「前後」のような名詞についての言及はされていなかった。実際に生活の中で、「500人前後」、「3時間程度」のような数量詞に後接する表現は頻繁に見られる。例えば、以下のような例がある。

- (45) 新型コロナウイルスの感染者が500人前後になる。
- (46) かつて国土の70%を覆っていた森林は現在35%程度になっているという。
- (47) 2000字程度のレポートの書き方を考えている。

<sup>12</sup> 副助詞の中に、「だけ」、「のみ」のような数量の範囲を限定する副助詞もある。例えば、「今日のサークルディスカッション会議には3人だけ参加した。」の「だけ」を削除しても、「3人」という人数は変わることがなく、単なるその数を強調していると考えられ、今回の分類に入れないことにした。また、「代」は年齢に後接する場合は、一般的に年齢の範囲を指し示す。例えば、20歳代は20歳から29歳を表す。

(48) 原稿用紙は5枚程度となる。

「前後」は数量詞の後ろに付くときに、一般的に数量のその規準値を含め、それに近い度合を表し、「程度」はそれぐらいの度合いを表す。いずれにしても数量詞に付く場合は、明確な量を表すことができない。そのため、本稿は「数量詞+名詞」によって組み合わせたものを準特定数量詞の一種として扱う。

#### 4.5 (5) [副詞+数量詞+副助詞・名詞] 型

これまで、副詞と副助詞、名詞がそれぞれ数量詞の前後に置かれる現象を考察してきた。次に、副詞と副助詞・名詞の両方が同時に数量詞に付くものを見ていく。この種の数量詞はそれほど多くないが、書籍や日常生活においてよく見られるため、以下のように整理しておく。

- (49) だいたい二時間ぐらい待った。
- (50) 新しく買った車はおよそ 600 万円ぐらいかかった。
- (51) 約 5 キロほど痩せた。
- (52) 甘エビ 1 箱は約 30 尾前後入っている。
- (53) 検査時間はおおよそ 15 分間程度だ。

(49)～(53) の例において、「だいたい二時間ぐらい」、「およそ 600 万円ぐらい」、「約 5 キロほど」、「約 30 尾前後」、「おおよそ 15 分間程度」といった表現はすべてある程度の量の度合を表している。そのため、これらの表現を一つまとめたものとして扱う場合に、これも準特定数量詞の一種だと考えられる。従来の数量詞の研究では、このような表現はほとんど見逃されていた。しかし、事態を十分に把握できない場合には、このような表現がよく使用されている。原因の一つとして、聞き手に対して発話者は断定的に情報を伝えないことを通じて、自分自身の発話に対する責任などを軽減することができるかと推測できる。そこで、準特定数量詞の一分類として、「約 30 尾前後」のように「約」と「前後」が数量詞の前後に置かれているものを一形態として扱う。つまり、[副詞+数量詞+副助詞・名詞] 型というカテゴリーに分類することができると思われる。

#### 4.6 (6) [数詞的疑問詞+「か」] 型

日本語において、「何人・何回・何頭…」のようにそれぞれ人の人数や動作の回数、動物の数について回答を求める数詞的疑問詞が多い。さらに、数詞的疑問詞の後方に「か、も、でも、にも」などを付けることができる。例えば、「いつか・いつも・いつでも・だれにも」などがある。そこで、本稿は「いくつか・何人か・何個か・何回か…」といった曖昧な数量を表す表現



に着目し、このようものを準特定数量詞に分類する。

- (54) いくつかの市町村をまとめて新しい一つの市を作ろうとしている。
- (55) 先週暴風の日、学生のうち何人かは学校に来たが、ほとんどは来なかった。
- (56) ワンピースのフィギュアが何個か追加で入った。
- (57) 人生には、大きなチャンスが何回か訪れる。

『広辞苑（第七版）』によると、助詞「か」は種々の語に付き、活用語には連体形に付く。話し手の疑念を表し、その結果、この語を受ける結びが活用語の時は、断言することを避けて連体形になり、係結びの関係ができる。上記の例では、主に「疑問詞」に「か」を付加する構造であり、意味的に不確定な情報を指すことがわかる。例えば、(54)の市町村の数が不明確であり、(55)では、学校に来た学生の人数もわからない。(56)と(57)も同じである。しかし、「か」を付加することで、その数・量の範囲を把握することができる。その範囲は大体3から6までの間だと考えられるが、人によって微妙に変わる可能性もある。少なくとも1以上の数値となるだろう。また、前述した「数(すう)+助数詞」型で表す量と重なる部分があると想像できるが、やはり個人差があり、両者が数量を表す差異を断言できないため、ここでは議論しないこととする。上記で言及したもの以外に、「何冊か」、「何枚か」、「何本か」、「何羽か」などがある。

- (58) 太郎の部屋に赤いペンが何本かあった。
- (59) 私は言語学の本を何冊か持っている。
- (60) 何杯か飲むと、会話の流れはいつも社内の噂話に向かってしまう。

これらの例からみると、話し手が物事の数・量を断言せず、聞き手に情報を伝えることは一種の発話戦略だと考えられる。また、「数詞的疑問詞+か」という組み合わせは連体用法となるものもあり、動詞を修飾する連用用法も持っていると同様と観察できる。

#### 4.7 (7) [概数数量詞] 型

宇都宮(1995)は、おおよその数量をあらわすものを「概数」と定義しており、例えば、「数人・大体・何人か(も)…」がある。本稿では、「概数」という用語だけを引用する。そして、この種の数量詞のことを概数数量詞と称する。宇都宮では、「2, 3人」の場合は概数とも定数とも判じがたいと指摘している。理由については触れていなかったが、宇都宮(1995)が「2, 3人」を概数であると判断しない理由の説明としては、「2人か3人か」という二選択しかなく、「2人」と「3人」の間に連続している数が存在しないからであると考えられる。もちろん、数

学において、「1.5人」や「2.5人」という表現が現れる場合がある。しかし、現実の世界では人間はひとりひとり独立している存在であり、「1.5人」のような存在は有り得ないと想像できる。「2, 3人」のような数量詞が特定数量詞のように具体的な数量を表せないという点は事実であるが、本稿ではこのようなものが数量上一定の幅を持っていると考え、準特定数量詞に分類する。よって、本稿は具体的な数がわからず、一定の幅を持っている観点から、概数数量詞も準特定数量詞の一種と判断する。

- (61) 昨日の懇親会では知り合いが2, 3人いた。
- (62) この会議室は2～30人使用できる。
- (63) 日本へ3～5回行ったことがある。
- (64) 最大積載量 200～300 kg の車がある。

(62) は会議室の収容人数を表す例である。つまり、25人や27人がいるとしても、この会議室に納められる。(63) も同じく、4回行ったこともあり得る。(64) は200 kg以上、300 kg以下の荷物であれば許される。また、例文から観察できるように、概数数量詞を表記するときに、「2～30人」や「20人～30人」、「20, 30人」のように形態上のバリエーションもある。「2, 3人」は一桁であるのに対して、「20人～30人」は二桁、「200～300 kg」は三桁となっている。さらに、「2, 3人」、「3～5個」のように、数詞が二つ並んでいるものがある。前者の数詞は連続しているが、後者は連続していない。しかし、一つ目の数詞は最小値、二つ目の数詞は最大値を表す共通点が見られる。さらに、「20～30人」を見ると、二つの数詞が連続しているように見えるが、実際、「21人, 22人…」という中間的な数値が存在するため、非連続となっている。このように、本稿は、桁が同じであるという前提から、二つの数詞が連続している数量詞をA型とし、離れている数量詞をB型とする。これ以外に、概数数量詞の前後に、副詞や副助詞、名詞によって修飾され得るものもある。本稿では、この種のものを統一に概数数量詞に分類する。例を以下に示す。

- (65) 注文した服は届くまでに約1～4日かかるということです。
- (66) 4つの選択肢を1～2秒程度で眺めることができる。
- (67) 授業が終わったあと、200～300字程度の感想文を書いてください。
- (68) リフトアップ整形は大体3～5年くらいの効果があるらしい。

また、以上の例文における「1～4日」、「1～2秒」、「3～5年」といった概数数量詞は書き言葉として表していることが観察できる。文字を見るだけで意味が理解できるが、音声で相手に伝える場合は、どのように表すかという問題について、従来の研究ではほとんど触れられ

なかった。例えば、「1～2秒」は「イチニびょう」、「イチびょうからニびょう」、「イチびょうかニびょう」のような音声上のバリエーションがある。本稿は分類を中心に議論を行っているため、このような音韻形態上の問題を今後の課題として詳しく論じていきたい。

### 5. まとめと今後の課題

本稿は日本語の数量詞の種類に着目し、先行研究における分類を概観した上で、特定を持つか否かという視点から、数量詞を「特定数量詞」、「不特定数量詞」、「準特定数量詞」の3つに分類した。そして、照応性の有無という観点から、さらに細分化することを試みた。「特定数量詞」とは特定の数量を表し、照応性を持たないものである。「不特定数量詞」は不特定の数量を表し、中には照応性を持つものと持たないものがある。そして、「準特定数量詞」とは特定の数量を表せず、一定の幅を有しており、照応性を持たないものである。主に副詞、副助詞、名詞によって修飾された準特定の数量を表すものである。また、新しく提案した「準特定数量詞」の形式が多様であるため、下位区分として〔副詞+数量詞〕型、〔「数」+助数詞〕型、〔数量詞+副助詞〕型、〔数量詞+名詞〕型、〔副詞+数量詞+副助詞・名詞〕型、〔数詞的疑問詞+「か」〕型、〔概数数量詞〕型という7つに細分化した。表にまとめると、以下のようになる。

表3 現代日本語の3種類の数量詞

現代 日本語の 数量詞	特定数量詞	照応性を持たない	1個、3台、5回、250 km、500 g、1億円、3時間、7大学…	
	不特定数量詞	照応性を持たない	たくさん、かなり、少し…	
		照応性を持つ	全員、全部、全て、半分、三分の一…	
	準特定数量詞	照応性を持たない	〔副詞+数量詞〕型	約3時間、およそ5マイル、大体30名…
			〔「数」+助数詞〕型	数回、数年、数行…
			〔数量詞+副助詞〕型	1時間ばかり、10年ぐらい…
			〔数量詞+名詞〕型	500人前後、3時間程度…
〔副詞+数量詞+副助詞・名詞〕型			だいたい二時間ぐらい、約30尾前後、およそ15分間程度…	
		〔数詞的疑問詞+「か」〕型	何人か、何個か、何回か…	
		〔概数数量詞〕型	2～3人、4～6人、3～5回、200～400 kg、200～300字程度、約1～4日、大体3～5年くらい…	

本稿では、現代日本語における数量詞の種類を考察する際に、できるだけ幅広く数量詞を収集し分類することを試みた。分析する過程で、数量詞の構文にも様々な特徴があることに気づ

いた。これについて、今後3種類の数量詞の間にどのような意味用法や特性の違いを持つのかという問題を深く分析したい。

(ちょう きんきん・言語科学研究室)

## 参考文献

- 池上禎造 (1940) 「助数詞攷」『国語国文』第10巻3号, pp.1-27.  
宇都宮裕章 (1995) 「日本語数量詞体系の一考察」『日本語教育』87号, pp.1-11.  
加藤重広 (1997) 「日本語の連体数量詞と遊離数量詞の分析」『富山大学人文学部紀要』26, pp.31-64.  
加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.  
加藤重広 (2006) 『日本語文法 入門ハンドブック』研究社.  
東条佳奈 (2015) 「名詞型助数詞の用法—準助数詞「セット」と「組」を中心に—」『阪大日本語研究』27, pp.108-136.  
成田徹男 (1990) 「名詞と同形の助数詞」『都大論究』27号, pp.1-8.  
日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法2』くろしお出版.  
益岡隆志・田窪行則 (1992<sup>2</sup>) 『基礎日本語文法—改訂版』くろしお出版.  
三保忠夫 (2006) 『数え方の日本史 (歴史文化ライブラリー)』吉川弘文館.  
三保忠夫 (2010) 『日本語の助数詞：研究と資料』風間書房.  
渡辺実 (1952) 「日華両語の数詞の機能—助数詞と単位名」『国語国文』第21巻1号, pp.97-109.

## 辞書類

- 森山卓郎・渋谷勝己 (編) (2020) 『明解日本語学辞典』三省堂.  
日本語文法学会 (編) (2014) 『日本語文法事典』大修館書店.  
新村出 (編) (2018) 『広辞苑 第七版』岩波書店.  
小学館国語辞典編集部 (編) (2006) 『精選版 日本国語大辞典』小学館.  
松村明 (監)・小学館国語辞典編集部 (編) (2012) 『大辞泉 第二版』小学館.

## 【謝辞】

本稿を成すにあたり、多くのご教示を賜った加藤重広先生に深く御礼申し上げます。本文の文責はすべて筆者にあります。

